

佐田岬を継ぐ

佐田岬半島=伊方町の旧三町ごとに中心集落と周辺小規模集落とで構造化し、集落をまたいだ「佐田岬」全体で捉える事前復興計画。特に今回は、三崎集落の「八の字」を用い避難・復興がしやすいまちにすることを主題に周辺小規模集落との連携なども考えていきます。

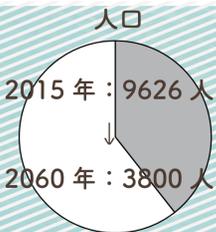
55集落に住みたい人を

最後の1人まで受け止める

55集落に残りたい人、Uターンしたい人、新しく住みたい人。
佐田岬55集落では、佐田岬に愛着のある人、魅力を感じた人が現在、そしてこれからも生活を営んでいきます。
人口減少や災害という危機を乗り越え、集落に住む人が少なくなっても豊かな生活を続けていく。
そのために今必要なことを提案します。

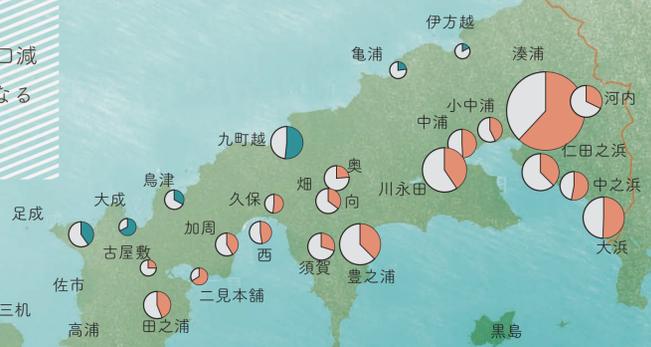


伊方町では半農半漁の暮らしを営み、漁業では一本釣りや落り、農業では段畑による柑橘類栽培が主に行われています。



伊方町は愛媛県の西端、佐田岬半島に位置する町です。大小さまざまな55の集落におよそ10000人が暮らしていますが、高齢化と人口減少により、将来的には生活の維持が困難になる集落が出てくると予想されます。

佐田岬55集落の現状

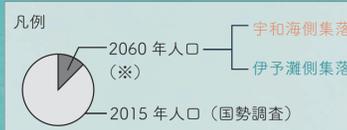


伊予灘側
津波最大高
：3~4m
到達時間
：地震発生後
約80分

宇和海側
津波最大高
：12~13m
到達時間
：地震発生後
約60~70分

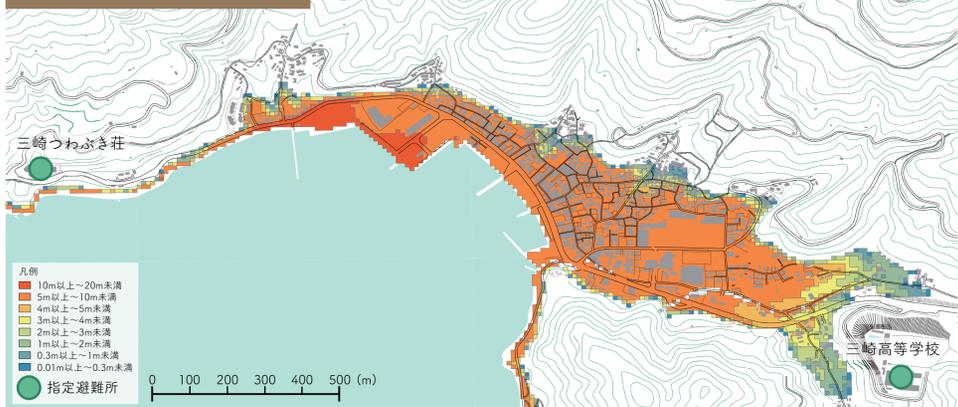


2005年に三崎町、瀬戸町、伊方町が合併して現在の伊方町となりました。旧三崎の中心である三崎、三机、湊浦は現在も行政機能や商業の中心地としての役割を強く持っています。



(※) 全国小地域別将来人口推計 (井上等) より作成 <http://arcgis/1LqC6qN>

三崎集落の課題



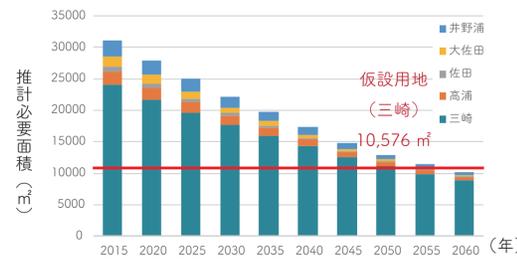
三崎集落は避難所が東西の端に位置しており、そこまで集落内から歩いて向かうには最長20分かかります。高台には避難所として利用可能な建物はなく、浸水域外を通過して避難所へ向かう道もないため、高台避難後に救助を待つ際の安全性が課題と言えます。

三崎の避難所容量 (※) と周辺人口



※三崎高等学校と老人ホーム三崎つわぶき荘の容量の合計

三崎の仮設住宅用地面積 (※1) と推計必要面積 (※2)



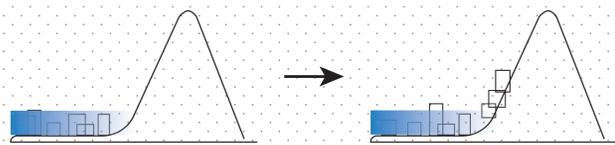
※1 三崎高等学校グラウンドの面積
※2 避難者のうち50%が建設型仮設住宅に入居すると仮定し、1戸あたり100㎡で推計

三崎とその周辺に位置する高浦・佐田・大佐田・井野浦は集落全域が浸水域であり、被災後は集落人口のほぼ全員が避難所生活を送ると考えられます。これらの集落の中で浸水域外の避難所があるのは三崎だけですが、その容量は2030年頃まで足りないと予想されます。その後、応急仮設住宅を建設する段階では、**深刻な建設用地不足**となることが予想され、その結果多くの人が集落外に移転し、**元の生活の場と乖離**したり、農業などの土地に根差した**生業の継続が困難**となることや、**集落内での再建に多大な時間を要**することが懸念されます。

コンセプト実現に向けた方針

人口減少や災害という危機を乗り越え、集落での豊かな生活を続けるために

1 中心集落の構造の転換



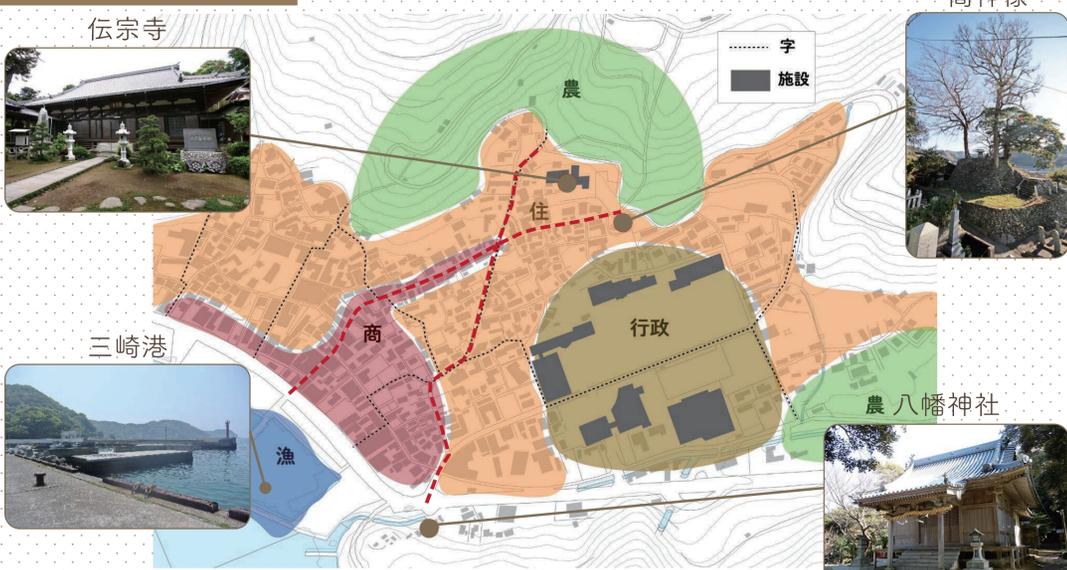
行政機能や商業の中心である集落にあらかじめ浸水域外に建物を作り、そこへの道を整備することで、**災害から避難しやすく、迅速な復興**ができる集落構造へと転換します。

2 集落間の人や物の移動の支援



すでにある様々な交通手段を共有し、余っている交通容量を乗り合いによって活用し、互いの移動を支援し合います。

三崎集落のいま



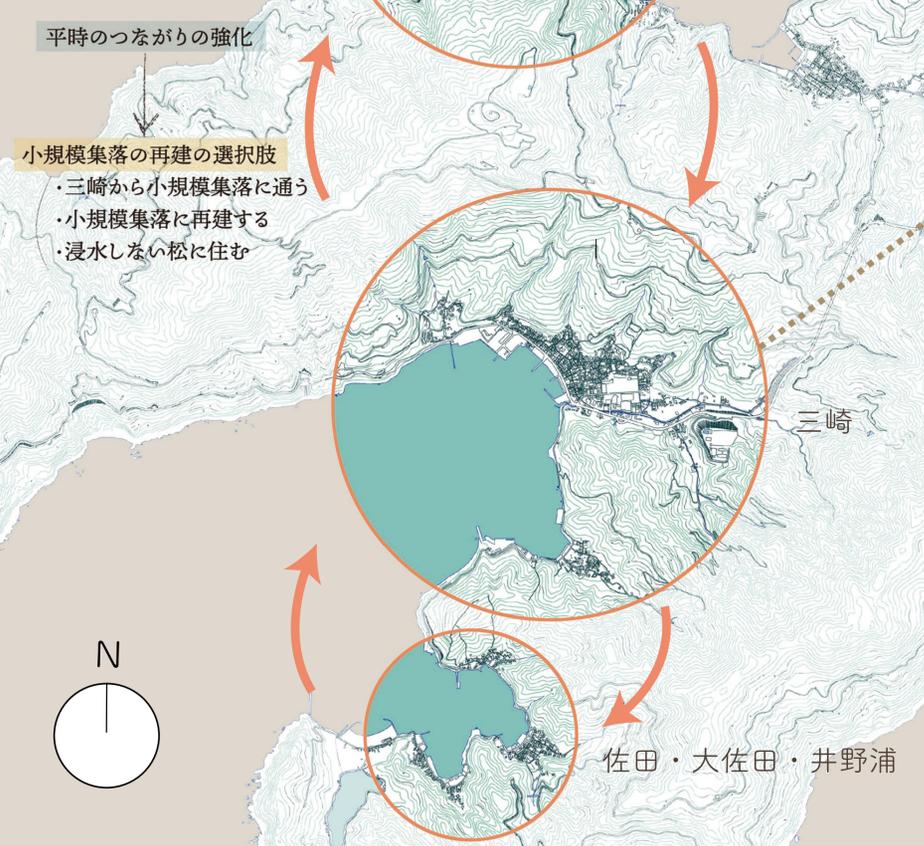
東西の避難所が遠い集落の中心部には、寺社・城跡・漁港・段畑など、三崎を象徴する風景があります。

提案

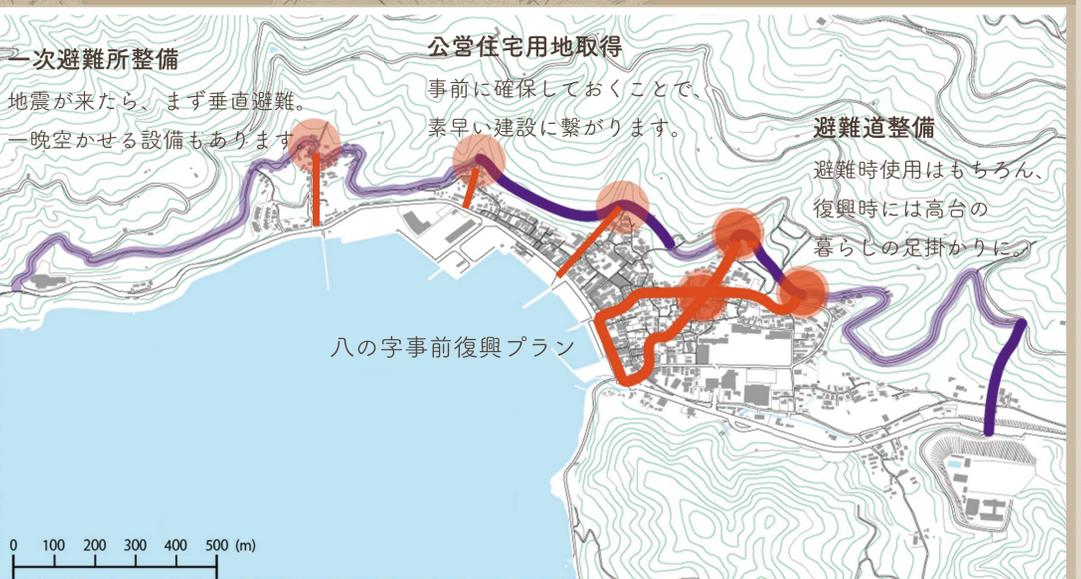
集落の中心部に、高台に避難所となる施設や災害公営住宅用地を確保し、高台と低地をつなぐ動線の整備を行います。さらにここを拠点として周辺集落と三崎を行き来する**乗り合い交通**を提案します。

三崎周辺集落の提案

平時から三崎との行き来が盛んであることが、避難時・復興時に役に立ちます。



1 中心集落の構造の転換：三崎集落の提案



2 集落間の人や物の移動の支援：移動するインフラ



八の字事前復興プラン

まちの重要な軸となる八の字道で「高台の暮らし」と「浜の暮らし」をつなぎます



災害前と復興後のまちはこう変わる

現在の三崎は東西に細長い形をしています、災害後は八の字を中心にコンパクトにまとまります。

住居は公営住宅の建つ高台側へ移動し、浜側には商業機能や漁業機能が集約されます。

こうすることで、三崎の人口が減ってしまっても、拠点性を失うことなく生活が続けられます。

三崎の現状



災害後の暮らし

